

オレとサイクリング

西原正人

金谷に書くのか、書かないのか、は、きり
せい。と言われたので、ここに体験の一
部を書いてみたいと思う。オレにとって
は、4年間のしめくりでもあるし、思い出
にふけりながら書いてみたいと思う。

高校時代にオレは友だちに

「オレは、自転車て日本一周してやるせし
と、言ったことがある。今から考えると、あ
の頃は若さがあったものである。」

大学に入るとしばらくぶらぶらと遊んでい
たが、サイクリング部のボスターを見たとき
高校時代に、自分が口走ったあの言葉を思い

出したのである。

「よし、いっちょやってみようか。」
というわけに入部。

早いものである。あれからもう4年周下して
しまったのか。

大山に登ったのは、オレが1年かときの
夏合宿である。この頃から、日比野とのくさ
此縁が始まっていたのかと思つと、身毛の
よだつ思いである。

我々は、宮島を出発して、中国山地を横切
り、山陰を東進、天の橋立までの行程であつ
た。その行程にあの大山が含まれていたの
ある。

視をあけると、アスファルトの道がまっす

くに繞っている。「登り道」といつものは、
カーブがたくさんほけいはいかんと思う。誰も
が経験があると思うが、

「あのカーブを曲がると、下り坂だろ？」

という期待が、我々サイクリストにはあるので
ある。

そのほかない期待などは、みごと打ち破る
大山の登り道であった。

お日様は、かんかん と照りつけて 色白の

僕ちゃんのお肌をちりちりと焼いちゃんだから
やんなちやうね。

と、その時オレは思った。そしてしたいにオ
レは疑問をもちはじめたのである。「オレはな

んでこんなことをやらなきゃならんのだ。」

「こんな坂道、車で登りて、リリーキ一発じゃね

えか。」しかし、その横をクローラーをたふふり
さかせたような車が通るたびに、

「オレは若いんだぜ！ オメーラみたいなひ弱
じゃねえぜ！」ヤルゼ！オレは。

というわけで、車に対して非常なる敵意をもち
ながら、ペダルをこぎつづけるのである。とに
かく登り、という間はこれの繰り返しであった。

「大山寺はまだか。」

ついにオレの頭の中ははこの言葉が浮んできた。

この種の言葉といふものはけ、して考えるも
のでは無い。これが出てくると、あせりと絶望
感がおそってきて精神的にまいってしまつもの
である。

しかし、その時のオレにそんな心理学の勉強
をしている暇はなかった。顔をあげるとあいか

わらず アスファルトとの道がまっすぐに続いて
いる。こうなれば車も外周もなしに、道端に大
の字になってぶたおれてや、かたと思つ。
しかし、

ここまで登ってきて、ここをやめましては
意味がなくなる。てしまふ。

走った。ただひたすら走った。ハシツタとい
うよりも、ハツタと言つておこつ。もうまわり
の車も氣に存らなくなつた。これも氣に存らな
くなつた。というのほ誤りで、氣にしている余
裕がなく、たのである。

どのくらいペダルをこぎ続けていたのだろうか。
時間的な感覚はあまりないが、とにかく氣が遠
くなるほど長い時間であつた。

ふつとペダルが軽くなつた。顔をあげると、

あのアスファルトの道ではなく、売店や寺の屋
根のようなものが見える。もしや
やつた——あ——！
そつた。ついに着いたんだ。

大山寺に着いたのである。

現金なものではあるが、今まで頭の中にあつ
た混乱状態はうそのよつに消え、すがすがしい
と言つるか、満足感と言つるか、何とも形容のてま
ない感情が胸のゆにひろがつてくるようになつ
ちであつた。このときの感激は皆にもわかつて
もらえると思つた。

仲間で売店に入り、氷いちごをたのんだ。こ
のときに食べた、米ほどおいしいものはないと
今でも思つている。

それから4年間、合宿も何回か参加したが、

すべてオレにとってはいい獲い出として残
っている。

最後に、

オレは、サイクリング部に入って本当によか
った。

後輩の皆も悔いの残らな、学生生活を送る
ためにも、想い出に残るような、良い旅行をし
ていた、良かったと思う。

(終)